

「次の震度7はどこか！」

2016年7月

1. はじめに

- ・東日本大震災直後及び御嶽山噴火直後の予測（角田先生との7年間のつきあい）

2. 熊本地震は前例のない群発地震ではない（松代群発地震）

- ・1965年8月から約5年半続いた火山性群発地震（有感地震は6万2826回）
- ・当時の地震学者が総力を結集して調査し、熱移送説とほぼ同様の結論に達していた。

3. 時代遅れのプレートテクトニクス説

- ・プレート説では四川大地震を説明できない（過去200万人以上が犠牲に）。
- ・プレート説の3つの原則はその後の観測事実で否定された。
- ・ハワイ・鹿島・アラスカの3地点を軸にプレートは時計回りの回転。マントルは対流せず。上田東京大学名誉教授「マントルはプレートを引っ張れるほどの粘着力がない」。

4. 熱移送説とは

- ・地震の原因は「プレートの移動」ではなく「熱エネルギーの伝達」。マンモルトモグラフィという技術が大きく貢献した。
- ・熱エネルギーは地核からスーパープリューム（南太平洋と東アフリカの2ヶ所）を通過して表層に運ばれ、表層を移動する先々で火山や地震の活動を起こす。南太平洋から出てきた熱エネルギーは3つのルートに分かれて北上する。
- ・熱エネルギーは1年に約100kmの速さで移動する。
- ・地震は、地下の岩層が熱が膨張して割れることにより発生する。大地の裂け目（古傷跡）である活断層は長い時間が経過するとくっついてしまうが、地下の高温で生き返ることがある（立川断層は死んだ活断層）。火山と地震の発生場所はほぼ同じ（環太平洋火山・地震帯）。高齢化した休火山の富士山の活動は弱い。

5. 熊本地震後はどうなるか（PJルート）

- ・再びM7クラスの地震が数年以内に発生する可能性が高い
- 2004年10月（中越地震、M6.8）、2007年3月（能登半島、M6.9）、2007年7月（中越沖、M6.8）
- ・2025～2045年あたりに中国地方の日本海側で（M7クラス）

6. 次の震度7はどこだ（MJルート）

- ・2017年から2018年にかけて、伊豆・相模地域（震源が浅い）
- 西之島の活発な地震活動（大規模な熱エネルギーが北上）
- 1930年（北伊豆地震、M7.3）、1974年（伊豆半島沖地震、M6.9）
- 東海道新幹線や東名高速道路の「ドスン揺れ」対策が焦眉の急
- ・その直後に、埼玉県南西部を経て東京湾北岸から千葉県中央部・東方沖にかけての地域
- 1931年（西埼玉地震、M6.9）

7月22日付け JB PRESS 参照